

---

ちぐはぐ

天

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ちぐはぐ

### 【NZコード】

N3815M

### 【作者名】

天

### 【あらすじ】

星雪高校。

そこには校外にも名の知れた姫と王子がいる。

だがしかし、周囲の予想と期待を裏切り、見た目姫は実は男で、見た目王子は実は女。

ちぐはぐな二人は別の容姿を夢見る。

姫は美男子、王子は美少女。

そんな二人の願いが呼んだものか、一人の中身は入れ替わる…！

が。

それだけで済めば良かつたものの、王子は実は腐女子で相手は男を希望！？

おまけに姫は女性に迫られて！？

ちぐはぐな二人のっこぼこバタバタな日々。

見た目と中身は女性ですが体だけ男が男に迫つたり、見た目と中身は男性ですが体だけ女性が女性に迫られたりします。  
そんなワケでBL、GLにチェック。

## ちぐはぐな二人

星雪高校。

そこには校外にも名の知れた姫と王子がいる。

処女雪のように白く清らかな、花も恥じらう美少女。

春風のように爽やかで、清潔感漂う美男子。

だがしかし、周囲の予想と期待を裏切り、姫は男で、王子は女性だった。

多くのいたいけなティーンの嘆きと悲哀を呼ぶその事実。

悲劇をまき散らすその二人は、別の容姿を夢見る。

姫は男らしい姿を。

王子は異性に好まれるような可愛らしさを。

これはそんなんちぐはぐな二人が呼んだ、一風変わった物語である・。

## 救いの手は王子から

また、だ・・・。

倉条晶はきつくなじみしめた。

満員を越えて詰め込まれた通学電車の中、窓際に押しかられた晶は、周囲の人と扉に挟まれて身動きが取れない。

逃げ場がない。

そんな中自分の臀部に感じる、ただ当たつたものとは思えない不審な動き。

泣きそうな思いになる。

もう何度田の経験だらう。

いくら同じ田にあつたとしても、この屈辱と不快感に慣れる事はない。

慣れたくない。

同じ男として、こんなことをする相手をできればぶちのめしたい。

そう晶は男、れつきとした日本男児だった。

ブレザーではあるが学校の制服を着てもいる。

なのに女性と間違われる。

それはその容姿に問題があつた。

きらと星を浮かべた黒田がちな大きな眼。白桃を思わせる頬。何をしなくとも紅を注したようにふっくらと魅惑的な唇。まるで特別に誂えられた人形のような美貌。

そして誰もが守つてあげたくなるに違いない華奢な体躯。

そのせいで姫なんていう不名誉なあだ名を影で囁かれる始末。

そんな本人は望まぬ美少女な容姿のため、こんなハメに陥ること過去數度。

いつもは気にかけ自然に守つてくれるー我ながら情けないが、幼なじみも今日から新学年だというのに風邪でいない。

晴れやかな気分で迎えたい今日の日を台なしにされて、情けないや

ら悔しいやう。

しかし、チカソです！と突き出す勇気はないのだ。

- 男だし。

だが晶には希望があった。

目指す星雪高校最寄りの駅はすぐそこ一  
もつ扉は開く。

待つてましたとばかりにホームへ飛び出す。  
ほつと息をついて速足に階段へと向かう。  
そして数段階段を上った時、下から手をとられた。  
え？と振り向く晶のすぐ下で、くたびれたスーツの男がにやりと笑  
う。

盛大に？マークを飛ばす晶の手をとつたまま、男は晶の一段上まで  
上つた。

「あの・・・？」

不審な顔で腕を取り戻そうとする晶に顔をよせて男は囁いた。

「続きをやりに行こう」

瞬間全身が総毛立つ。

「イツさつきのチカソ！？」

咄嗟に腕を振り晶は

「放して下さい！」

と叫んだ。

しかし手は離れず、男はぐいぐいと晶の腕を引く。  
周囲を気にする余裕もなく、また叫ぶ。

「放して！」

思わず涙が出てしまいそうなほど、パニックに陥る。  
第三者の声がかかったのはその時だった。

「何をしてるんですか」

穏やかなのに有無を言わせぬ響きを持つそれ。

「何つて・・・」

男が何か応じようとする。

晶は縋るよつに声の主を見た。

同じ制服だった。

しかし晶とは全く違う、晶の理想そのもののよつなその容姿。凜として涼しげな目元。シャープな顔立ち。晶より数段高いその身長。美男子という言葉を体言したよつなその姿。

羨ましくて仕方ないその人物の名を晶は知つていた。

棚生光、同じ星雪高校本日より2年生。

校外にも名の知れた王子、その人だつた。

「嫌がつていいでしょう」

光が外そつとしたのか、男の腕に手を伸ばす。

それを邪魔する意図か、男は大きく腕を振つた。

すつと後ずさつてそれを除けた光の前、男のもう片方の腕が晶に当たる。

不意を突かれた晶の重心が、後ろへと傾く。

慌てた晶の手が縋るものを探して周囲をさ迷い、

「危ない！」

叫んで差し出された光の手に、迷わづ晶は縋つた。

しかし、光もすつかり体勢を崩した晶の体重までは支えきれず、二人は落ちる。

痛みを覚悟し晶は、ぎゅつと田をつむつた。

2度の衝撃。

予想したほどの痛みはなかつた。が。きやあつと悲鳴が上がるのを聞いた。それを最後に、晶の記憶はどぎれた。

## 提案したのは王女から（前書き）

チカンに絡まれる姫を助けようとした王子。  
しかし二人は共に階段を落すという危機に見舞われる。  
果たして二人は・・・?

## 提案したのは田中から

「おー、おー！」

声と共に誰かに揺すられた感覚に意識が浮上する。

ゆっくり眼を開けた晶は、田の前にあるものを確認すると、もう一度眼をつぶつた。

自分の顔が田の前に・・・夢だ。もう一度寝よう。

だが

「おー、こり起きろー。」

と再びもつと激しく揺さぶられる。

しぶしぶ眼を開けると、やはりいつも鏡で眼にする、恥ずかしい少女顔が田に入る。

「お前、倉条晶？」

リップを塗つたようになぶつくなつ色づく顔が、そのまま葉を紡ぐ。「やつだけど？」

何を当たり前のことを、どこか声音で晶は返した。

おかしな夢だ。

てか、なんかあちこち痛い・・・といつかなんで自分の体の上に、自分が乗ってるんだ。

田の前の自分の顔が、何かを憂えるように陰る。

「君たち大丈夫？」

そう傍に立つおじさんから声をかけられ、晶はわけもわからずに頷く。

声に顔をあげた田の前の自分の顔も、

「大丈夫です、ありがとうございます」

と応じた。

おじさんから声をかけられ、はじめて周囲を田にして、晶はじこが駅構内であることを知る。

そういうえば自分は通学してたよくな・・・

「あ！」

やつと階段から落ちたことを思い出し、咄嗟に自分の体を確認する。そして、違和感に襲われた。

いつもの自分より、長く感じられる手足。学校の制服を着てはいるのに、首に巻いているのは何故かネクタイではなく、リボンだった。

それは女子の・・・

そう思ったところで、晶はぱっと自分の顔に両手を当てた。え、まさか、そんな・・・ウソだろ？

「状況がわかったようだな。・・・立てるか？」

目の前の自分の顔が、真顔で至極冷静にそう言つた。

まさか、これって、まさか・・・

先に立ち上がった自分の体から手を差し出され、晶は無意識にそれを掴んだ。

引き上げられ、つられて立ち上がりながら、晶は必死にそれを否定した。

しかし、数瞬の気絶による寝ぼけが覚めた脳内に導き出された結論は。

オレたち、入れ替わった！？

晶は、中身はたぶん棚生光だと思われる自分の体に導かれて、駅の待合室へと向かった。

促されるまま椅子に腰かけ、光の・・・自分の顔を伺う。

「困ったことになつたね」

ため息をつき、もらされた第一声はそれだった。

「困つたどころか・・・」

晶の顔は・今は光のだが・泣きそつて歪む。

「どうやれば元に戻るでしょうか・・・」

不安げに言を紡ぐ晶の顔を見て、光は再度ため息をついた。

「また階段落ちるとか？私はイヤだよ」

確かに、晶の・光の体はあちこちぶつけたらしく結構痛い。  
これをもう一度やるのは、晶だつて気が進まなかつた。

でも。

「それしかないならそういうしか・・・」

「それは最後の手段にしよう。今度は当たりどころが悪かつたりしたら、シャレにならない」

光は冷静にそう告げる。

その落ち着きに晶は安心すると共に、少し恥ずかしくなる。  
女の子がこんなに落ち着いてるのに、不安を隠そうともしなかつた  
し、泣きそうにもなるし。

「他の方法を探そう。こんなマンガによく出るネタ、なんか参考になる解決法もあるかもだしね」

まあ期待しない方がいいだらうけど・・・

三度目のため息に、晶は頷く。

「わかりました、調べてみます」

頷きながら光は一瞬上に向けた視線を晶に戻した。

「それまで、互いの振りをして生活しよう」

それは仕方ないと晶も同意する。

そうして二人は互いの情報を交換することとなつた。

## 不満があるのは一人とも（前書き）

なんと階段落ちの衝撃で中身が入れ替わってしまった一人。  
すぐには戻れなさそうとしばらくお互の振りをすること。  
果たしてバレずにうまくできるのか！？

## 不満があるのは二人とも

二人はピーク時よりだいぶ人垣のまばらになつたと思われる、組み分け表の前に向かつた。

新学年初日、最も始めてに確認すべき重大な事項だ。

二人が近づくと、自然人垣が道を開ける。

いつも通りに、周囲から姫、王子の呼称と共に、ステキ、可愛いなどの言葉がもれる。

今日はそれプラス、勿論何故二人が一緒に?との疑問がついていたが。

いつも通り晶も極力周囲を気にしないようにして、自分の組を確認する。

今の状況では自分ではなく、光の方を確認すべきなのだが、まだ二人ともそれに気づいていなかつた。

「あ、1組」

間も無く晶が自分の名前を見つけ、声をあげる。

そのすぐ後に光も続いた。

「こつちも1組」

「都合がいい、のかな」

「お互いフォローできそうだね」

顔を見合わせそう言い合つ。

その時、晶は自分の袖口をひっぱる感触に、左を見た。

「光ちゃん、一緒のクラスだよ」

につこりと笑うのは光の親友である冬木美波ふゆき みなみだつた。

晶は携帯の写真と共に彼女の事を聞いていたので、なんとか間をあけず応える事ができた。

「そうだね、良かった」

ぎこちなく笑う晶の視界に、大丈夫かな、と言いたげな自分の顔が映る。

「え、えっと、駅で知り合つた、倉条晶」

これから互いの振りをするに当たり、親しくしておいた方が良いだろう、という光の判断の元、打ち合わせ通り光をといふか、自分をとこ「うか・・・美波に紹介しておく。

「はじめまして」

光は控えめに微笑つて頭を下げた。

その笑い方が本当に美少女然としていて、晶は声を上げて注意したくなるのを我慢する。

そういう笑い方はやめてほしい！

「わー姫と仲良くなつちやつたの？さすが光ちゃんだねー」

姫と言われ表情が歪みかけたが、それより先に

「あ、ごめんなさい、こいついう言われ方イヤだつたかな？えっと冬木美波です、仲良くして下さい」

と言われ肩の力が抜ける。

「いえ、大丈夫です。僕の方こそ仲良くして下さい」

にこにこと応じる光にはいや、大丈夫じやないよ！と言いたくなつたが。

晶に自然に促され、三人は教室へ向かつて歩き出す。

「なんで知り合つたの？」

話に聞いていた通り、純真無垢な笑顔でにこにこと美波は聞いてくる。

「恥ずかしい話だからそこはスルーで」

打ち合わせ通り、晶はなんとか早口に言つた。

「そりなんだ、『ごめんね』

申し訳なさそうに美波は晶と光の顔を見る。

晶こそがちょっと申し訳ない気持ちになつたが、今日知り合つた顛末を話す事などできない。

入れ替わつた話を除いたとしても！

チカンの事を思い出しましたちょっと氣分が悪くなる。

「ううん、ありがとう、冬木さん」

光はにつこりと美波に応じている。

その笑顔がやはり美少女すぎて、注意したくてやきもきする晶だった。

一方光は。

晶の語意の少なさと態度のそつけなさにやきもきしていた。

一緒にクラスになつた感想が良かつただけな事に、

美波と一緒に嬉しく、美波のいのい生活なんて考えられな  
いからね、

と抱擁くらいいするだろ！

と自分の過剰な愛情表現を期待していたし。

スルーを許し、謝つてもくれていてるのにノーコメントな事に、  
ごめんね、本当は美波に隠し事なんてしたくないんだけど。

一人のプライドに関わる事だから、

とかフオローしろよ！

と天然ナンパ師、根っからの王子氣質の自分を常識だと考えていて。  
ただでさえ自分の顔にコンプレックスがあり、黙しがちな晶に、そ  
んな芸当ができるはずもないのだが。

そして計算したかのよろんな笑顔の技術で、今の自分の顔、晶の美貌  
を引き出すのに最適な笑顔を作つている事も意識していないのだつ  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3815m/>

---

ちぐはぐ

2011年10月7日05時21分発行